

〔『法学新報』第28巻9（323）号 大正7年10月1日〕

○高橋捨六氏逝去 中央大学社員法学士高橋捨六先生は今春肺炎に罹り漸く癒へしも兎角腸胃の疾患意の如く治せず正金銀行の職務は監査役なる閑職に転じて二の宮の別荘に専ら静養し居られしか七月に入り医師は直腸痛なることを認め其後帝国大学病院に入りて佐藤博士の手術を受け一時苦痛を脱せしも衰弱日に加はり八月十五日午後三時遂に渋谷氷川裏の邸に永眠せられたり享年五十有七、先生は文久二年三月十日を以て福井市に生れ長して今の東京帝国大学に入り明治十八年首席を以て法科を卒業し大蔵省に官仕して令名あり其後官を辞して弁護士と為り其業務を執る誠実にして熱心世上の信用漸く厚く選はれて弁護士会長に挙げられ名声斯界に嘖嘖たりしも多年法律顧問たる正金銀行の招聘に応じて同行に入り調査課長兼検査課長として尽瘁し晩年病の爲め監査役と為らる而して先生は我中央大学創立当時よりの講師にして余等は先生より英国売買法の授業を受け其熱心且つ懇切なるに感動したり其後親族法を講せられ又維持員として、社団法人の社員として中央大学の経営を援助せられ我大学の先生に負ふ所多し先生は壮時直情径行侃諤苟も曲事あるを容ざるの風ありしか年と共に円熟して温厚の長者たり又頗る学生を愛して之を教養し先生の恩顧を受くる者幾人なるを

知らず大審院検事林頼三郎氏の如きは其一人なりし先生の葬儀は八月十七日午後四時青山斎場に於て執行せられ当日来り会する者朝野の諸名士数百名導師玉窓寺住職山志田普照師は衆僧を従へて莊嚴なる式を行ひ次て弔辞の朗読あり岡野学長は中央大学を代表し石山彌平氏は学員会を代表して弔文を朗読せられ何れも悲痛を極めしか最後に同窓会を代表したる林頼三郎氏の弔文を朗読せらるるや先生恩愛の深きを述ふるに至り一句一句涙殆ど読むに堪えず場中為めに能く仰き視るなく時に歎歎する者あるに至る夫れより喪主弘氏、遺族並に会葬者の焼香ありて式を終ふ嗚呼余の先生を病床に訪ひしは八月一日にして当時先生は談笑常に異なるなかりしか僅に旬日にして遂に白玉楼中の人と為らる追想すれば茫として夢の如し感慨曷ぞ禁せん哀哉（佐藤正之記）